

6月3日 聖霊降臨の主日

使 2:1～11 ロマ 8:8～17 ヨハ 14:15～26

1. ロマ

v.9 「神の霊があなたがたの内に宿っているかぎり、あなたがたは、肉ではなく霊の支配下にいます。キリストの霊を持たない者は、キリストに属していません。」

復活された主イエス・キリストが父のもとから聖霊を送ってくださって、神の国の相続人である教会が地上に誕生しました。聖霊は父なる神の霊です。そしてそれは同時にキリストの霊であって、すべて福音を信じて洗礼の秘跡を受けた人を神の国の相続人として新しく生まれさせてくださいました。「神の相続人、しかもキリストと共同の相続人です」(v.17) とあるとおりです。

聖霊は私たちキリスト教会と共にいてくださって、私たちのミサを通し、特に秘跡を通して救いの恵みを与えてくださいます。「神の霊によって導かれる者は皆、神の子なのです」(v.14)。しかし「キリストの霊を持たない者は、キリストに属していません。」(v.9)

ここで「肉」という用語の解説をしておきましょう。聖書において「肉」とは、人間に属する“すべて”を包括する概念です。これは聖書の世界に独特なヘブライ的な概念であります。ところが私たちが生まれ育った今の時代は、ヘブライ(ユダヤ思想)ではなくてヘレニズム(ギリシア思想)に端を発する西欧文明の流れの中にありますから、そのために聖書用語の多くが人々に間違っ理解されたりします。西欧文明の中で育った人々は、人間は肉体と精神(魂)とから成り立っているというふうに考えます。ところがヘブライ的な概念では人間は「肉」と「霊」が一つになって生きているものなのです。ヘブライ的な概念で言う「霊」は神から出て人間に宿っている“命の息”であって、神がこの「霊」を取り去られると人は塵に帰ります(創 2:7、詩 104:29、コハ 12:7)。ですから「肉」とは人間の肉体も、精神や心情も、すべてを包括した総称なのです。

キリストの霊が宿っている人は、キリストの霊に導かれて信仰の人生を歩みます。それと対比してキリストの霊を持たない人(教会に属さない人)が「肉(の人)」であり、キリストの霊によって導かれない人が「肉に従って生きる」(w.12-13) のです。洗礼の秘跡によって聖霊を受けるということは、私たちが救われるか否かにとって決定的な事柄なのです。

2. 使

ユダヤ教の五旬祭の日がキリスト教の聖霊降臨祭の日になった起源の物語りで、特に強調されていることがあります。それは聖霊は洗礼の秘跡によって人々がこれを受ける以前に、先ず使徒たちに降り、使徒たちをキリストの福音の証人また宣教者としたということです。v.1, v.4 の「一同」とは、この物語りでは明らかに「使徒たち」(v.6) のことを指しています。w.5-11 の人々の驚きとは、この聖霊を受けた使徒たちの

宣教を“理解することが出来た”という驚きでした。

使徒たちとその他の働き人たちの宣教を聖霊が用いて、人々にキリストの福音を理解させてくださったので、信じた人々は洗礼の秘跡によって聖霊を受けることになったのでした。

3. ヨハ

ですから現代の私たちの教会も、使徒継承によって代々に互って受け継がれて来た福音の宣教を聞くことによって、真の教会であり続けることが出来るのです。

使徒継承というのは、聖伝と聖書によって教会に受け継がれて来ていて、両者ともミサと固く結びついています。主イエス・キリストが教会に託された御自分の死と復活の記念祭儀であるミサの中で、「聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる」(v.26)のです。

「わたしを愛する人は、わたしの言葉を守る。わたしの父はその人を愛され、父とわたしはその人のところに行き、一緒に住む」(v.23)という主の言葉は、ミサのことを指しています。聖霊の賜物と働きは、ミサと切り離して考えることは出来ません。

私たちがミサを大切に、ミサを良いものにするための一同の奉仕によって、21世紀の教会を真の教会に造り上げて行くようにとの呼びかけが、今朝の朗読聖書から聞こえて来るではありませんか。

アーメン、ハレルヤ。

6月10日 三位一体の主日

箴 8:22～31 ロマ 5:1～5 ヨハ 16:12～15

聖霊降臨後の最初の主日は、三位一体の主日です。灰の水曜日以来中断されていた年間が再び始まりました。

「唯一の神を礼拝するわたしたちが、三位の栄光をたたえることができますように」と、今朝の集会祈願で祈りました。三位一体の教理は、キリスト教会が4世紀に開いた二つの教会会議を経て完成し守り抜くことの出来た、教会の信仰の本質に関わる大切な遺産なのです。現代の私たちは、“ニケア・コンスタンチノーブル信条”という形でこの教会の信仰の遺産を持っています。そして今朝の朗読聖書も、この“ニケア・コンスタンチノーブル信条”と深く関わっている聖書の箇所が選ばれています。このような信条との関わりを心に留めて、今朝の聖書の学びを進めてみましょう。

1. ロマ

vv.1-2 「このように、わたしたちは信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ており、このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています。」

私たちの信仰にとって、主イエス・キリストは大切な方です。「このキリストのお陰で」とは、私たちの信仰の大切な要素、これなくしては信仰が成り立たないような事柄です。私たちは主イエス・キリストによって救われ、神の国の希望に生きる民となりました。この「希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。」(v.5)

このキリストについて、“ニケア・コンスタンチノーブル信条”は次のように宣言しています。

「神よりの神、光よりの光、まことの神よりのまことの神。」

2. 箴

ここにその起源が描かれている“神の知恵”を、新約聖書は十字架と復活のキリストと同一視しました(1コリ1:24,30、黙1:8)。そして“ニケア・コンスタンチノーブル信条”は、「主はよろず世のさきに父より生まれ、……。造られずして生まれ、父と一体(同質)なり」と述べたのです。

私たちの救い主は神が創造されたもろもろの被造物の一つではないということ、現代の私たちもよく理解する必要があります。神の子キリストへの信仰ではなくて、人間イエスのファンクラブのようなものにキリスト教を変えようとする異教化の誘惑が、現代の教会にも満ちているからです。

「キリストは、神の身分でありながら、神と等しいものであることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。」

(フィリ2:6-8)「“天使たちよりも、わずかの間、低い者とされた” イエスが、死の苦しみのゆえに、“栄光と栄誉の冠を授けられた” のを見えています。」(ヘブ2:9)

受肉されたイエス・キリストは、「自分を無にして」、「わずかの間、低い者とされた」けれども、「まことの神よりのまことの神」であったからこそ、私たちの救い主となることが出来たのです。

3. ヨハ

「聖霊は……父と子とともに拝みあがめられ」と“ニケア・コンスタンチノープル信条”が述べているように、ヨハネ福音書は聖霊が来ることを語る際に、「その方」と表現しました。私たちは聖霊が御子と共に父なる神から遣わされる“神”であることを忘れてはなりません。神の被造物に過ぎないこの世のもろもろの霊とははっきり区別された“聖霊なる神”への信仰を、教会は使徒継承によって受け継いで来たことに感謝したいと思います。

現代のキリスト者である私たちが聖霊について思いを巡らすとき、私たちが主日ごとにささげているミサに注目することは大切なことです。ミサは“ことばの典礼”と“感謝の典礼”という二つの中心によって出来ているのですが、この二つの典礼を成立させてくださっているのは他ならぬ聖霊なる神であることを理解しましょう。その日の奉仕者が第一と第二の朗読をして、続いて司祭が福音書の朗読と説教をするとき、そこに聖霊が訪れて来てくださると、これらの人間の奉仕を通して神のことばが会衆に語りかけることになります。

v.13 「しかし、その方、すなわち、真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる。」

聖霊なる神がそこで働いてくださるからこそ、“ことばの典礼”はキリストの福音の宣教の場となるのです。

v.14 「その方はわたしに栄光を与える。わたしのものを受けて、あなたがたに告げるからである。」

同様に、私たちの“感謝の典礼”でパンとぶどう酒を主イエス・キリストの御からだと御血に変えてくださるのは、そこに訪れて来てくださる聖霊なる神です。そして聖霊はこのキリストの御からだと御血に共に与かる私たち一同を、神の国の民として一つに結びつけてくださいます。

「唯一の神を礼拝するわたしたちが、三位の栄光をたたえることができますように。」(今朝の集会祈願)

アーメン、ハレルヤ。

6月17日 キリストの聖体

創 14:18～20 Iコリ 11:23～26 ルカ 9:11～17

復活節が終わって年間に入ると、その二番目の主日は“キリストの聖体の祭日”です。受難と復活を通して新約の大祭司となられたキリストの聖体の奉献が、主日ごとの私たちのミサで再現されて、会衆一同がこれに与かって一つに結ばれることは、教会の存立の根拠であります。

「この神の民は、その起源において聖であるが、感謝の祭儀に意識的、行動的、効果的に参加することによって、聖性の中に成長し続ける。」(ミサ典礼書の総則 前文5)

1. ルカ

イエスは集まった群衆を迎えて「神の国について語り」(v.11)、それに続いて彼らに食べ物をお与えになりました。ルカ福音書はこの物語りを、ミサを意識して描いています。ミサの第一の部分である“ことばの典礼”では、いつもキリストの福音、神の国の福音が語られていました。

“ことばの典礼”とはそういうものなのだといわば当然のことが、20世紀のキリスト教ではしばしば忘れられて来たことを、私たちは反省しなければなりません。

ルカ福音書はここで、復活されたイエスが弟子たちに現れて「四十日にわたって……神の国について話された」(使 1:3)、その神の国の福音のことを言及しているのです。それは著者ルカが当時の教会のミサのことを考えてこの物語りを描いたからでした。このような、福音書成立の背景というものを理解することは大切なことです。

v.16 「すると、イエスは五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで、それらのために賛美の祈りを唱え、裂いて弟子たちに渡しては群衆に配らせた。」

ここに「賛美の祈り」とあるのは、当時のユダヤ人がいつも食卓でささげていた“ベラーカー”という祈りのことです。私たちが現在使用しているミサ次第では、この“ベラーカー”に準じて「パンを供える祈り」と「カリスを供える祈り」の二つが作られています。

司祭：神よ、あなたは万物の造り主、ここに供えるパン(ぶどう酒)はあなたからいただいたもの、大地の恵み、労働の実り、わたしたちのいのちの糧となるものです。

会衆：神よ、あなたは万物の造り主。

そして当時の教会で助祭たちが手分けして会衆に御聖体を配って回った様子が、この物語りから想像されるのです。

2. 創

メルキゼデクというのは、伝説の祭司です。イスラエルの父祖アブラハムが彼に献げ物をしたという創

世記の伝説によって、メルキゼデクは永遠の祭司と考えられていました(詩 110:4、ヘブ 7:3)。

イエス・キリストは受難の後に復活して天の聖所に入り、「永遠にメルキゼデクと同じような大祭司となられたのです」(ヘブ 6:20)。このキリストの永遠の祭司職を、御自分の代理者に与えて神の民の集いでミサを司らせるために、「主キリストは神の民に祭司職を与え、奉仕の務めにたずさわる人びとを選んで司祭としてくださいました」(聖木曜日の聖香油のミサの叙唱)。ですから「十字架のいけにえと、ミサにおけるその秘跡的再現は、奉献のしかたを除けば同一のものである」(ミサ典礼書の総則 前文 2) のです。

3. Iコリ

使徒パウロはここで、伝承から受け継いだ主の晩餐の制定のことばを叙述しています。「主から受けた」とは、他の使徒たちとは別に、復活のイエスから直接パウロが聞いた彼独自のものという意味ではありません。そうではなくて、教会にこのような伝承を受け継がせてくださり、またこれからも受け継がせて行ったださる方が主御自身であることを、パウロは語っているのです。その叙述を締めくくっているのが、この言葉です。

v.26 「だから、あなたがたは、このパンを食べこの杯を飲むごとに、主が来られるときまで、主の死を告げ知らせるのです。」

「主の死を告げ知らせる」とは、「イエスは、わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられたのです」(ロマ 4:25)、「もし、イエスを死者の中から復活させた方の霊が、あなたがたの内に宿っているなら、キリストを死者の中から復活させた方は、あなたがたの内に宿っているその霊によって、あなたがたの死ぬはずの体をも生かしてくださいませしょう」(ロマ 8:11) という信仰を宣言する(告白する)ことになるという意味です。

ミサに参加する会衆一同は、感謝の祭儀の中で御子の奉献に一つに結ばれて自らをささげます。

「教会がキリストの死と復活の記念を行うとき、救いの力がわたしたちのうちに働きます。」(レオ秘跡書) アーメン、ハレルヤ。

6月24日 洗礼者ヨハネの誕生

イザ 49:1～6 使 13:22～26 ルカ 1:57～80

1. ルカ

洗礼者ヨハネは福音書の主人公ではなくて脇役です。彼はイエスが登場すると、それと交代するように舞台から去って行きます。しかし彼の誕生も、その短かった生涯も、神から来る喜びで満ちていました。

「その子はあなたにとって喜びとなり、楽しみとなる。多くの人もその誕生を喜ぶ。」(1:14)

「だから、わたしは喜びで満たされている。」(ヨハ3:29)

彼の母エリサベトは主の母マリアに、「主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いですでしょう」(1:45) と言いましたが、洗礼者ヨハネが誕生するとその同じ信仰によって彼女は、「いいえ、名はヨハネとしなければなりません」(v.60) と言い、父親の「ザカリアは口が開き、舌がほどけ、神を賛美し始めた」(v.64) のでした。そして、「主に先立って行き、その道を整え、主の民に罪の赦しによる救いを知らせる」(v.76-77) 日が来るまで、「幼子は身も心も健やかに育ち、イスラエルの人々の前に現れるまで荒野野にいた」(v.80) のでした。

2. 使

洗礼者ヨハネは、聖書の読者である私たちが通常想像するよりもはるかに影響力のある人物であったようです。彼は「偉大な者」(マタ 11:11、ルカ 7:28) と呼ばれましたが、メシアではなくて(ヨハ 1:20)、主の民に悔い改めとイエス・キリストによる罪の赦しを宣べ伝えた人でした。

私たちの福音は“ヨハネの福音”ではなくて“イエス・キリストの福音”なのです。

v.26 「この救いの言葉はわたしたちに送られました。」

私たちが主イエス・キリストの福音を信じて救われるために、洗礼者ヨハネはその先駆者として神から遣わされて、悔い改めを宣べ伝えたのでした。ですからキリストの福音を信じている私たちは、「約束に従って、このダビデの子孫からイスラエルに救い主イエスを送ってください」(v.23) 父なる神を信じると同時に、その父なる神が「イエスがおいでになる前に、イスラエルの民全体に悔い改めの洗礼を宣べ伝え」(v.24) させるために、洗礼者ヨハネを遣わされたことをも信じるのです。

3.

主イエス・キリストの復活と昇天を経て、使徒たちによって「罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる」(ルカ 24:47) ようになりました。そして 21 世紀を迎えた現代の教会も、使徒継承によって“悔い改めと罪の赦しの宣教”を確かに受け継いで来ているのです。それは私

たちがイエス・キリストの救いを受けるためです。

「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます。」(使 2:38)

「救いは、玉座に座っておられるわたしたちの神と、小羊とのものである。」(黙 7:10)

救いは人間が作り出すものではありません。洗礼者ヨハネや初代教会の使徒たちがそうであったように、すべての宣教者たちはいつの時代にも“罪の赦しによる救い”を与えてくださる主イエス・キリストを証して来ました。

しかし私たちがそこで生まれ育った 20 世紀の教会を、そのような尺度で振り返ってみると、どうも何かピントが狂っていた ……、基本から外れていたような感じがするのです。確かに、私たちが見聞きする現代の教会では、少なくとも声高に、“悔い改めと罪の赦しの宣教”が語られているとは思えません。

洗礼者ヨハネは「罪の赦しを得させるために悔い改めの洗礼を宣べ伝え」(ルカ 3:3) ました。使徒継承によって受け継がれて来た現代の宣教も、これと同じものである筈です。

「それは、彼らの目を開いて、闇から光に、サタンの支配から神に立ち帰らせ、こうして彼らがわたし(キリスト)への信仰によって、罪の赦しを得、聖なる者とされた人々と共に恵みの分け前にあずかるようになるためである。」(使 26:18)

私たちは 21 世紀の教会をふさわしく造り上げて行く(エフェ 4:12)ことを、神から期待されている者たちなのです !! アーメン、ハレルヤ。